

(別紙様式3)

令和2年3月31日

## 研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 鹿児島市鴨池新町10番1号  
管理機関名 鹿児島県教育委員会  
代表者名 教育長 東條 広光



令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

### 記

#### 1 事業の実施期間

令和元年4月1日(契約締結日)～令和2年3月31日

#### 2 指定校名

学校名 鹿児島県立甲南高等学校  
学校長名 西橋 瑞穂

#### 3 研究開発名

地球規模でものを考え行動する21世紀薩摩スチューデントの育成

#### 4 研究開発概要

1年次は、課題研究に取り組む素地を身に付け日本国内を対象に研究した。2回の校内発表や大学レベル講義、大学教授陣による指導助言をいただき研究内容だけでなく、知識、発表技能を学習した。また、12月には選抜された15人が台湾研修を行った。

2年次は、個人による課題研究を深め、英語の運用能力も高めた(Advanced English I)。継続的(年6回)に鹿児島大学の教授陣に指導助言をいただきながら、校内での3回の課題研究発表会、外国人講師による集中講座(キックスタートセミナー)等で社会課題に対する理解を深め、論理的に思考し、その研究内容と発表の質を高めた。

3年次は、研究を執筆し、論文を書き上げた。7月の最終発表会後も、研究論文を執筆する生徒もおり、翌年2月に論文集を著した。

その他、SGH運営指導委員会を2回開催、SGH研究発表大会では研究成果の普及に努めた。令和2年度計画も11月から取りかかり、円滑な事業継続のための準備を行った。

## 5 管理機関の取組・支援実績

### (1) 実施日程

業務項目	実施日程							
	6月	6月	8月	10月	11月	1月	1月	3月
ア 指定校への支援		・第1回SGH運営指導委員会			・SGH研究発表大会	・「学びにUK」最終選考会	・第2回SGH運営指導委員会	・研究開発完了報告書作成
イ グローバル人材育成	・国際教育・グローバル人材育成講演会		・イングリッシュトレーニングキャンプ	・中国語研修プログラム				

### (2) 実績の説明

#### ア 指定校への支援

##### (ア) 管理機関における事業の管理

##### ① 運営指導委員会による指導・助言

令和元年6月19日と令和2年1月15日の2回、6人の運営指導委員により、課題研究をはじめとするSGHの取組の状況や校内体制、関係機関との連携に関して指導助言及び成果の検証・評価を行った。

##### 【運営指導委員】

- ・影浦 攻 氏（鹿児島純心女子大学副学長・教授）
- ・松本 茂 氏（立教大学教授・グローバル教育センター長）
- ・有村 青子 氏（指宿シーサイドホテル(株)常務取締役）
- ・寺園 直喜 氏（鹿児島県国際交流協会専務理事）
- ・大平 優子 氏（鹿児島県農協共済組合連合会 家畜審査課審査係長 獣医師）
- ・桑代 毅彦 氏（鹿児島県企画部 企画課長）

##### ② 管理機関による管理・指導

高校教育課内のSGH担当指導主事をはじめとして、県教育委員会関係者が、SGH関係行事等へ参加したり、選考委員等を務めたりするとともに、事業の進捗の管理や研究の成果の確認を行い、指導助言を行った。

##### 【行事への参加】

- ・SGH研究発表大会

##### 【選考委員、審査員等としての参加】

- ・「学びにUK」最終選考会における審査及び選考

##### (イ) 成果の普及・広報

- ・指定校主催の研究発表大会への参加促進
- ・県主催の教職員向け研修会等での指定校の取組の紹介
- ・課題解決型学習の先進的な取組、海外研修の実施等の紹介

## イ グローバル人材育成

### (7) 「かごしま・英語コミュニケーション能力育成事業」

中高校生が英語によるコミュニケーションを体験する機会等を設け、グローバル社会で活躍できる鹿児島を担う若い世代を育成するため、以下の取組を実施した。

#### ① 国際教育・グローバル人材育成講演会

中学生、高校生とその保護者、教職員を対象に、中学生、高校生とその保護者、教職員を対象に国際貢献活動に実績のある専門家等の講演や留学フェア（個別相談も）を開催し、国際社会や留学への興味関心を高めた。（令和元年6月2日 高校生16人、中学生29人、保護者41人、教員24人）

#### ○講演等

・カグノ 麻衣子 氏

（在福岡アメリカ領事館広報部）

・留学や海外研修を体験した3人の学生、生徒によるディスカッション

#### ② イングリッシュトレーニングキャンプ

グローバル社会で活躍できる若者を育成することを目的として、高校生92人がALTや留学生と英語を用いた生活を送り、ディベート体験や異文化理解を深める活動等、英語によるコミュニケーションを体験し、英語コミュニケーション能力を高める機会とした。（令和元年8月7日～8日・台風接近のため2泊3日の予定を1泊2日に変更）

### (4) 清華大学における中国語研修

中国や中国語に興味を持っている高校生10人を対象に10月に1週間実施した。清華大学で語学研修を行うとともに、附属中学の生徒との交流や北京の文化的施設の見学などを通して、中国の歴史や現在の社会の状況等を自らの目で見えて体感することにより、中国に対する理解を一層深めた。（令和元年10月20日～10月26日）

## 6 研究開発の実績

### (1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
(A) 課題研究のための教材開発	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(B) 課題研究やグローバル・スキルの評価		○		○			○	○		○	○	○
(C) 大学や企業、公的機関等との連携	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	※△
(D) フィールドワークや成果発表の場としての国内外研修			○	○	○		○	○			○	※△
(E) 生徒の発表方法の改善や発表機会の拡充				○	○	○	○	○		○	○	※△
(その他) アクティブ・ラーニングの研究	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

※ △は3月の臨時休校により、計画していたが実施できなかったものを指す。

### (2) 実績の説明

#### ア 「課題研究のための教材開発」

- 使用教材の整理・改善
- 開発教材に合わせた単元計画を作成

- ・ 課題研究のために開発してきた5年間の教材を再編成し、生徒と指導する職員がより一層使いやすい教材や指導案を開発した。
- ・ W-K I（「総合的な探究の時間」の呼称）の際は、毎週最後に1年担当職員（19人）が集まり、授業案の改善をその都度行い、単元計画を作成した。

#### イ 「課題研究及びグローバル・スキルの評価」

- ルーブリックの評価基準を改訂
- グローバル・スキルとSGH事業の評価の実施

- ・ 課題研究の研究概要と発表におけるルーブリックを生徒により理解しやすいように改定した。
- ・ 課題研究の進捗状況、研究発表会での発表、そしてSGH事業で育んだグローバル・スキルを中心に行った。
- ・ 課題研究の進捗状況は、授業の中でチェックシートを用いて生徒、指導教員両方が内容を確認でき、今後の研究の進め方について情報共有できるようにした。
- ・ 2月の課題研究発表会では、1・2年生徒間の相互評価が行えるように工夫した。

- ・ 2年生のスライドを使った研究発表では審査員による評価を行った。(研究内容、発表態度、スライドの完成度、質疑応答の内容)
- ・ グローバル・スキルは、構想調書にグローバル・スキルとして挙げた項目について、アンケートを実施した。
- ・ SGH事業が生徒の思考力にどのような影響を与えているか確認するために Cambridge 大学の TSA 思考力テストを日本語に翻訳したものをを用いて、3学年のSGH対象生徒42人とその他の生徒276人に違いがあるかを調べた。
- ・ 本校のSGH事業の妥当性について連携する大学職員にアンケートを実施した。

#### ウ 「大学や企業、公的機関等との連携」

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国内外の6つの大学、5つの企業等との連携事業の実施</li> <li>○ のべ158人と連携</li> </ul> |
|--|

学校外の人や組織との連携によって主に以下のような協力をいただいた。

##### (7) 課題研究に関する生徒への指導助言や発表会の審査員

- ・ 鹿児島大学の職員・大学院生が年間18回、のべ81人来校し、課題研究の指導助言、審査を行った。
- ・ 1年生(319人)が同窓生の勤務先である鹿児島市内の企業(46社)をフィールドワークの一環として訪れ、多角的に指導助言を受けた。

##### (4) 国内外研修への事前事後指導の講師

- ・ 2年生(42人)が本校主催のキックスタートセミナー(2日間)に参加し、県内のALT6人より英語を使った表現方法を学んだ。
- ・ 2年生(15人)が海外で行う英語での課題研究発表のため、iBS外語学院長による表現力研修を受けた。

##### (6) 研究テーマに関する講義や表現力講座の講師

- ・ 1年生(319人)が課題研究や人口増減に起因する諸問題について2回大学講師による講義を受けた。
- ・ 1年生(319人)が南日本新聞社の記者4人による新聞記事の作り方についての講義を受けた。
- ・ 1年生(319人)が発表機会等でのより良い発表姿勢・態度を学ぶために表現力講座を受けた。

##### (5) 発表の機会の提供

- ・ 1年生(15人)が台湾師範大学で課題研究発表を行った。
- ・ 2年生(27人)が広島大学、和歌山大学で課題研究発表を行った。

エ 「フィールドワークや成果発表の場としての国内外研修」

- 台湾に15人の生徒を派遣
- 和歌山大学、広島大学に27人の生徒を派遣

(7) グローバル研修「学び台湾」（1年生15人 令和元年12月12日～19日）

- ・ 大学教授や大学生、高校生との交流・課題研究に関する発表、ディスカッション、フィールドワークを主な目的として実施した。
- ・ 台湾師範大学、蘭陽高級女子中学において研究発表を行い、研究内容についてディスカッションを行った。
- ・ 台北市内において研究テーマに関するアンケートを実施した。
- ・ 研究テーマの1つである環境問題について、行政院環境保護署の担当者と意見交換を行った。

※ グローバル研修「学びにUK」（2年生15人 令和2年3月4日～14日予定）は新型コロナウイルス感染拡大のため令和2年2月28日（金）に中止を決定した。

(4) 国内研修「和歌山大学研修・広島大学研修」（広島大学：2年生19人、令和2年2月3日、4日、和歌山大学：2年生8人、令和2年2月6日、7日）

- ・ イギリス研修に参加予定生徒以外のSGH対象生徒が上記の2大学で課題研究発表やディスカッションを行った。
- ・ 各大学では、教授から大学の説明や取り組んでいる研究について講話を聴いた。
- ・ 参加生徒全員がスライドによる研究発表を行った。自分の課題研究を理解しやすく発表し、同時に研究内容を検証することを目的とした。
- ・ 参加した大学関係者や学生からフィードバックを得た。

オ 「生徒の発表方法の改善や発表機会の拡充」

- 校内課題研究発表会を拡大
- 生徒の表現力を伸ばす授業・講座を実施

- ・ 1年・2年全体による校内課題研究発表会を2回開催した。（生徒：637人、教員38人、外部審査員のべ23人）
- ・ 3年代表10組による校内課題研究最終発表会を開催した。（生徒320人、教員20人、外部審査員1人）
- ・ 2回目の校内課題研究発表会では、1年生と2年生が相互に発表し、質疑応答、評価を行った。
- ・ 1年319人、2年15人が表現力向上のため、表現力研修を受けた。1年生は、体を動かしながら2時間様々な表現方法を体験した。2年生は、英語でのプレゼンテーション発表のためジェスチャーや言葉のリズムについて学んだ。
- ・ 学校設定科目Advanced English Iでは、2年42人がオーラルでの英語発表ができるようにディスカッションや模擬発表を中心とした授業を受けた。
- ・ 学校設定科目Advanced English IIでは、3年生43人が研究をまとめるために、生徒は学術論文の形式の書き方を学び、英語で自身の課題研究を執筆して論文を書き上げた。

- ④ 2年生40人が、英語による表現力・思考力を伸ばすことを目的とした2日間の集中講座(キックスタートセミナー)を受けた。ALT6人を講師として招聘し、発表、ディスカッション、ディベートを行った。
- ⑤ 11月のSGH研究発表大会ではパネルディスカッションを開催した。卒業生の大学1・2・3年生3人大学院生1人社会人1人を招聘し、本校1・2年生637人と本校職員50人、大会に参加した他校教員46人の前で高校・大学での学び、SGH事業で培われたもの、よりよく生きるための進路選び等について意見を交わした。
- ⑥ 学校外の発表会では、「九州大学アカデミックフェスティバル2019」や「第5回高校生国際シンポジウム」、「全日本高校生模擬国連大会」、「第17回『金融と経済を考える』高校生小論文コンクール」など10大会延べ36人が選抜されて参加した。

#### カ 「課題研究以外の研究開発単位」

- アクティブ・ラーニング型の授業の実施
- 職員の相互授業参観や職員研修を実施

- ⑦ 全教科でアクティブ・ラーニング型の授業を展開した。学習指導法研究委員会を中心に授業の改善を図った。
- ⑧ 「Advanced English I, II」を含め、各教科・科目で発問の工夫について研究した。
- ⑨ 教員全体の研修会を実施し(令和2年3月18日)、次年度の更なる改善のために教科ごとに取り組んでいる授業法について発表し情報を共有した。
- ⑩ SGH研究発表大会では理科と地歴公民科が公開授業を行い、校外の教育関係者にも公開し主体的な授業展開及びSGH事業と教科との連携の成果を示した。
- ⑪ 教員4人が課題研究の進め方や、教科間連携の有効な手法を学ぶために先進校視察を行った。(教員2人 令和2年2月8日(土)埼玉県立浦和第一女子高等学校、教員2人 令和2年2月22日(土)金沢大学附属高等学校)

#### キ 「その他の事業」

- ⑫ SGH運営指導委員会を2回(6月、1月)運営した。
- ⑬ SGH研究発表大会を開催した(11月、校外参加者:51人)
- ⑭ アジア高校生架け橋プロジェクトの留学生を1人受け入れた。(9月~3月)

### 7 目標の進捗状況, 成果, 評価

#### (1) 目標の進捗状況 (SGH構想調書に挙げた目標)

##### 目標1 テーマ「人口問題に起因する諸問題」に関する生徒の知識と涵養

SGH対象の3年生43人がチューターの先生の指導を受けながら英語での研究論文を完成させた。2年生42人は課題研究を深め、英語で発表することができた。また、国内の大学において課題研究発表を行い、概ね必要な知識・教養が身についた。

## 目標2 グローバルリーダーに必要なスキルの習得

「SGHアンケート」（3年1月実施）による指数は前年度と比べ上昇し、高いレベルを維持している。

「あてはまる」、「ややあてはまる」と答えた生徒割合の前年度比較（%）

	SGHスキル	それ以外のスキル
SGH対象生徒	67.3→85.7	76.9→81.2
それ以外の生徒	37.4→40.4	70.0→75.2

経験の有無に関しては、SGH対象生徒の高さは顕著で、特にプレゼンテーションと比較的長い英語の文章を書いたことがあると答えた生徒は9割以上であった。SGH対象外の生徒の指数も上がっていることから、全校的にスキルの習得が上がっていることがわかる。

## 目標3 教員のさらなる授業力向上、学校の変革

約9割の職員がSGH事業の意義を理解し、授業を行い生徒に意識付けをしていると回答している。（第2回学校評価アンケート 12月実施）学習研究指導法研究委員会や進路指導部を中心に全職員が授業改善に取り組んでいる。

### (2) 成果とその評価

指定3年目の文部科学省によるSGH中間評価にて「外部の協力に頼りすぎて学校職員の関わりが少ない」と指摘されていた。昨年度からの改善を引き続き継続させ、課題研究の指導を全職員で行った。今年は特に学年間の接続の改善を図り、次年度を意識した計画を作成し実行した。職員間の意見交換の機会を増やしたおかげで職員のかも向上した。

卒業した3年生のSGHスキルは前年度比10%以上改善し、本校が設定したSGHスキルに関しては過去4年間の統計の中で一番良い数値が出た。一方で、TSA 思考力テストにおいては、批判的思考能力だけでなく問題解決能力のポイントが減少し、次年度は対策が求められる。

## 8 5年間の研究開発を終えて

### (1) 教育課程の研究開発の状況について

- 「総合的な学習／探究の時間」と学校設定科目 AE I, II
- 課題研究への取組と、学校内外での研究発表や研修

ア スーパーグローバルハイスクール指定後のグローバルリーダー育成のために「総合的な学習／探究の時間」で生徒に課題研究に取り組ませた。研究の素地をつけるために1年次は単位数を1増加し、2単位で行った。

イ 学校設定科目「Advanced English I, II」では、生徒が英語による発言、質疑応答や研究内容の執筆ができる力を育成した。生徒はイギリスの大学での研究発表や論文執筆ができるまでの力を身に付けた。



ウ 教科「情報」を1年2年で1単位ずつ行い、課題研究に関する情報機器の扱い方や情報リテラシーを学べるようにした。

エ 校内課題研究発表会を複数回開催した。5年次の3学期1年・2年の発表会は合同で行い、先輩からのアドバイスの機会を増やし、課題研究のノウハウを生徒の中でも蓄積・維持していく方法を探った。

オ 成果発表等のため国内の大学で国内研修を行った。（鹿児島大学、広島大学大学院、和歌山大学）

カ 成果発表等のため台湾研修、イギリス研修を行った。台湾では、1年生15人が大学・高校にて研究発表を行った。また、台北市内での研究テーマに関するフィールドワークや官公庁での意見交換を行った。イギリスでは3大学1高校で研究成果発表やディスカッションを行った。また、ホームステイ等で多文化理解の重要性を学んだ。

キ フィールドワークの機会を求めて「トビタテ！留学 JAPAN」に応募し、4年間連続で生徒が選ばれた。

ク 課題研究の発表の場や、生徒指導教員の情報共有の場として高校生国際シンポジウムを一般財団法人と共同開催した。（第1回～第3回）

## (2) 高大接続の状況について

- 課題研究に関する生徒への指導助言や運営の支援
- 大学キャンパスでの研究発表や討議の場の提供

指定1年次から高校の教員と大学の教員が連携して教育活動を展開してきた。

### ア 大学レベル講義講師

1年生を対象に年2回開催した講義に講師として指導助言をいただいた。指定以前から2年生対象に大学教員による出前講座（15講座）を開催していた。

### イ 研究発表会の審査員

校内で行う課題研究発表会に審査員として審査や指導助言をいただいた。客観的・専門的な見地から生徒の課題研究を評価していただいた。

### ウ 研究発表や討議の場の提供

国内外の大学で課題研究を発表するだけでなく大学教員の講義受講やディスカッション等を経験した。和歌山大学では、本校卒業の在校生も交えた意見交換ができた。広島大学では留学生との英語によるディスカッションが行えた。鹿児島大学では、授業内で発表機会をいただいた。台湾師範大学では、地域社会学を学ぶ学生に対して発表した。オックスフォード大学、ケンブリッジ大学では現地で学ぶ大学院生に対して発表するだけでなく、

院生の研究プレゼンテーションを聞いたり、世界の様々なトピックに関してディスカッションを行った。UCLでは大学講師によるワークショップを行った。

エ 課題研究に関する指導助言や研究手法（実験）等の支援

設定した研究テーマの妥当性や、研究手法を中心に、生徒は大学教員から継続的に指導助言を受けた。鹿児島大学とは年7回に分けて約8人の大学教員が本校を訪問して直接指導を行い、一部の生徒に対しては検証実験の支援をしていただいた。高崎商科大学萩原豪准教授には台湾研修日程のコンサルティングにも協力していただいた。

オ 高校職員研修講師

本校教員を対象とした職員研修に講師として指導助言をいただいた。高校段階での課題研究に対するアプローチや高校教員ができる生徒支援方法について学んだ。

カ 大学の単位修得制度は設置しなかった。

(3) 生徒の変化について

ア 学校評価を使った考察

学校評価項目（抜粋）

- 1 SGH指定校としての取組が、将来のグローバルリーダーとなり得る甲南生を育成する取組になっている。
- 2 W-KIプロジェクト（「総合的な学習／探究の時間」）に主体的に取り組み、自己の成長に役立っている。
- 3 授業をとおして、自分の考えを自分の言葉で表現し他者に伝える力の向上に努めている。

「よくあてはまる」、 「ややあてはまる」の割合

	H27	H28	H29	H30	R 1
1 SGH事業への理解	83	83	83	86	83
2 W-KIへの主体的な取組	67	62	68	71	73
3 自己表現の向上	74	78	78	79	81

※ 生徒による学校評価は年2回実施（7月、12月）

- ・ 指定1年目からSGH事業の意義は理解されている。
- ・ 生徒の探究活動に対する取組が学校全体で上がった。
- ・ 生徒の自己表現に対する主体的な取組が学校全体で上がった。

イ TSAからの考察（データは令和元年度報告書に記載）

- ・ 問題解決能力のポイントは全体的に下降し続けている。項目によってはSGH対象外の生徒の方が良いポイントを出している。複数の因子が関連しており、アンケート結果から十分な分析ができなかった。

- ・ 批判的思考力は向上している項目もあるが、正答率が30%以下の項目もあり、満足ができる結果は出ていない。

ウ SGHアンケートからの考察（データは令和元年度報告書に記載）

- ・ 本校が設定したグローバル・スキルに対して全項目でポイントが上がっている。
- ・ 主体性、柔軟性のポイントが高く、自ら進んで課題研究に取り組み、相手の気持ちになって考え行動できることがわかる。
- ・ 国内外の問題に関心があるだけでなく、具体的に説明ができることがわかる。
- ・ 他と比べ、計画力、創造力は低く、計画を立て行動したり不測の事態に計画を修正し行動する力はまだ不十分である。従来の常識にとらわれ、課題研究において創造的な部分が不足していることが考えられる。

エ その他の変化

- ・ 英語を使ったコミュニケーション能力が向上した。国内外での英語による課題研究発表やディスカッションができる生徒が生まれた。

実用英語技能検定						
級	準2級		2級		準1級	
	合格者	受験者	合格者	受験者	合格者	受験者
H26	162	248	82	181	0	14
H27	188	248	170	420	2	43
H28	125	129	171	338	3	44
H29	133	151	147	426	8	124
H30	96	126	166	463	9	169
R1	78	89	156	313	10	138

- ・ 課題研究や学校での教育活動をとおして、学校外での活動に挑戦する生徒が増加した。全日本高校模擬国連大会においては、平成27年度、29年度、30年度、令和元年度出場した。

トビタテ！留学 JAPAN		
	応募者	合格者
H27	0	0
H28	1	1
H29	3	2
H30	5	2
R1	6	2

- ・ 自分の将来をより具体的に考え、これまでの生徒より幅広く進路先を考える生徒が生まれた。（SGU対象大学への進学等）

(4) 教師の変化について

ア 学校評価を使った考察

学校評価項目（抜粋）

- 1 地球規模でものを考え行動できるリーダーとして、高い志を持った品格のある生徒を育成することを意識し、教育活動を行っている。
- 2 県内唯一のSGH指定校であることを自覚し、その着実な取組をとおして、生徒に将来グローバルリーダーとなり得る甲南生としての意識付けを図っている。
- 3 生徒参加型授業を積極的に取り入れ、生徒が自分の考えを自分の言葉で表現し、伝える工夫をしている。

「よくあてはまる」、「ややあてはまる」の割合

	H27	H28	H29	H30	R 1
1 リーダーの育成	90	93	95	91	88
2 リーダーの意識付け	76	94	82	88	88
3 アクティブ・ラーニング型授業	90	89	90	90	85

※ 職員による学校評価は年2回実施（7月、12月）

※ H27は7月のデータを使用，他は12月のデータ

- ・ 指定1年目から多くの職員がグローバルな世界で活躍できるリーダー育成を意識していた。
- ・ 指定1年目からアクティブ・ラーニング型の授業の実践に挑戦していた。
- ・ リーダー育成と授業改善は高い数値を維持している。
- ・ 5年目になってリーダー育成とアクティブ・ラーニング型の授業のポイントが若干下がっている。指定終了に関連する不安や、異動によって指定1年目と比べ教員が替わり教員の意識の変化が考えられる。

イ 教員からの聞き取りによる考察

- ・ 多くの教員がSGH指定後からの生徒の変化や社会情勢をみて、探究活動などの教育活動に効果があることを実感している。
- ・ 外部との連携（特に高大連携）を特別なことではなく、教育活動を行っていく上で自然な取り組みであると捉えている。
- ・ 教員が生徒の進路や社会情勢について更に興味関心を持ち、教員自身も調べたり、考察したりしている。

(5) 学校における他の要素について

- ・ 短期／長期の海外留学生を受け入れている。
- ・ 本校の教育活動を理解してもらい、企業、保護者、同窓会等からフィールドワークの受入や海外派遣への支援等への継続的な協力を得ている。
- ・ 地域から評価を得て、県内で高い入学希望者数を維持している。その中で、女子進学者の割合が増えた。

(6) 課題や問題点について

ア 生徒の課題研究、グローバル・スキル及びSGH事業に関する評価方法の改善

- 生徒に対して、取り組んできた課題研究や発表に対して客観的な数値で示したフィードバックが十分ではない。例えば、ループリックによる評価を生徒ともに検証する時間を十分に設けていなかった。
- SGH運営指導委員会等で事業内容についての評価・検証を続けてきたが、分析内容を次年度に具体的方策として反映できないものもあった。

イ 探究活動指導法の検証

- 学年ごとに持っている指導ノウハウを他学年と共有するシステムを十分に構築できなかった。課題研究やグローバル・スキル育成における明確な学年目標と卒業時の最終目標を全職員でしっかりと共有すべきだった。

ウ 生徒の問題解決能力及び批判的思考能力の向上

- アンケート等からも問題解決能力及び批判的思考能力が他のグローバル・スキルと比べ低い。逆にこれらの能力をもった生徒の課題研究内容や発表は相対的に優れている。体系だった指導が必要である。

(7) 今後の持続可能性について

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>○ 現教育課程の継続</li><li>○ 課題研究への取組と、学校内外での研究発表や研修の継続</li></ul> |
|---|

ア スーパーグローバルハイスクール指定後のグローバルリーダー育成のために「総合的な学習／探究の時間」における全生徒対象とした課題研究の取組を継続する。

イ 学校設定科目「Advanced English I, II」を継続し、生徒が英語による発表、質疑応答や研究論文の作成ができる力を育成する。

ウ 課題研究は既に全生徒が取り組んでいる。今後は、学校全体としての達成目標を再設定し、クロスカリキュラムをもう一つの柱としたグローバルリーダーの育成への取組を継続する。

エ 校内課題研究発表会を継続する。1年・2年の発表会は合同で行い、先輩からのアドバイスの機会を増やし、課題研究のノウハウを生徒の中でも蓄積・維持していく。成果波及のために保護者等希望者にも公開する。3年代表の最終発表会は全校生徒が参加し、研究の質の向上を行う。

オ 国内の大学での成果発表等のための独自の国内研修を継続する。

カ 成果発表等のためのイギリス研修を継続する。

キ 大学等との連携を継続する。連携する大学・機関の精選をし、持続可能な運用方法を検討する。

ク 校務分掌に新たに課題研究部を設定し、より組織的・体系的に課題研究をとおした教育活動を行う。

【担当者】

担当課	高校教育課	TEL	099-286-5291
氏名	鶴田 美里映	FAX	099-286-5678
職名	指導主事	e-mail	ekoukou@pref.kagoshima.lg.jp